No.7 ■メディアによって形成された場所のイメージについて
—テレビドラマ「北の国から」が描く北海道—

環境文化史学研究室　西澤　昭子

1. 研究目的・研究手法

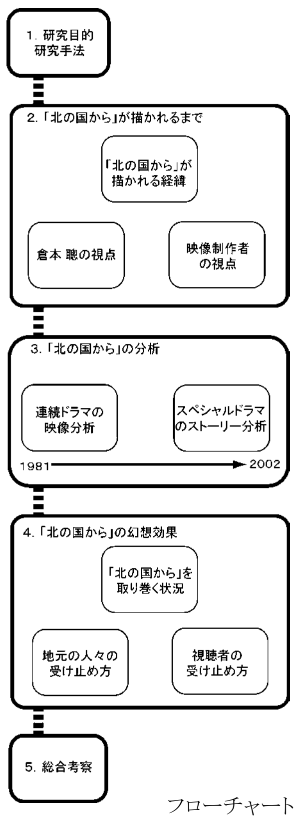
研究目的

本研究の目的は、“メディアが伝える場所”と“人”と“イメージ”との関係性を明らかにすることである。

まず、研究の概要を説明し（1）、メディアが場所をどのように伝えているかを分析（2，3）、次に伝えられた場所に人がどのように反応しているかを読み解く（4）。そして、それら両者にどのような関係性が見られるかをイメージをキーワードに考察する（5）。

研究対象メディアはテレビとし、テレビドラマ「北の国から」と北海道富良野市麓郷を分析対象とする。

映像は発売されている DVD12 巻を、ストーリーは発売されている VHS およびシナリオ本を分析する。



フローチャート

また、北の国からに関する書籍や、倉本聰の著作、フジテレビウェブサイトなども参考にする。

2.「北の国から」が描かれるまで

「北の国から」が描かれる経緯

1974 年、倉本聰はドラマ制作のトラブルから東京を逃れ北海道の地を踏む。札幌で二年半の執筆活動を経て富良野に定住。富良野では見るもの聞くもの全てがカルチャーショックであった。「都会の人間が抱く北海道のイメージを描いたドラマを」とのテレビ局の依頼に倉本は憤慨する。ここから「北の国から」は生まれた。都会のアスファルトの中で生まれ育った子ども達がいきなり電気も水道もない廃屋に住まされたらどうなるか、なにしろ倉本には富良野に来てからのことで書きたいネタが山程あった。13 ヶ月に及ぶ富良野ロケを終え、1981 年 10 月、「北の国から」の放送がスタートした。

倉本聰の視点

パソコン・リモコンなど文明に麻痺し、自分で出来ることも金を出して他人にしてもらう現代の人間、詰め込まれた知識ばかりの人間。それらの対極にいる、文明の発展から離れ、生きる力としての智恵を持った人間を、倉本は描いた。これら「文明批判」「知識より智恵を大事にする」という二つのメッセージは、「北の国から」に多数ちりばめられている。

映像製作者の視点

ロケ撮影は「演技以前に天気」と言うほど天候に左右された。自然風景は役者の撮影の合間や役者のロケ前後一週間など絶えず撮影、動物は別班を設けて撮影した。演出では「大きな嘘はついても小さな嘘はつかない」ことを留意。ドラマ自体はフィクションであるが、温度・重さ・息づかいなど、日常の表現で嘘のない演出が行われた。このリアリティの追求は、あくまで人の感情のリアリティを表現するために行われた。より実際に近いシチュエーションで演技に臨めば､おのずと演出以上の演技が役者から引き出せるのである。

3.「北の国から」の分析

連続ドラマの映像分析

映像にみられる特徴は､カメラワークと映像の流れに見られる。

カメラワークは、以下の２つの特徴が挙げられる。

【雄大なスケールを描く】
自然風景のみのパン・ショットだけではなく、その中に人や車を歩かせ走らせ、人や車の大きさと背景とを対比させることによって雄大さを表現している。また、それらの背景には山の稜線が常に入るが、これによって、富良野の地形が盆地の形態をとり、人の営みが行われる平地・丘陵とそれを見守る自然という空間構成をつくっていることがわかる。

【森の中を歩く】
森の中を歩くシーンは数多く見られ、草を分ける音と同時に草の陰から人を追うカメラワークの映像、人物の足元は植物に覆い隠され上半身のみの映像、足元だけを追ったカメラワークの映像などで、森の中の臨場感や、森の深さ、けものみちもしくは道なき道を歩く様子が表現されている。

映像の流れには３つのパターンが見られる。

【建築の外部⇒建築の内部での人の営み】
会話や食事のスタジオ撮影の映像を、富良野で繰り広げられているように見せる効果がある。

【自然風景⇒人の営み】
朝・夕など時間が分かる自然風景の映像や季節を連想させる映像に続いて、人の屋外活動の映像。人が活動している季節や時間を設定する効果がある。「北の国から」が、自然の中での時間の流れや季節の流れに即した出来事によって物語が展開される根拠となる。

【人の営み⇒動物の様子⇒人の営み】
撮影日時・場所が異なる映像をつなげて、二つの映像が同時に起きているように見せ、人の営みと動物の営みとが近接しているように見せる効果がある。また、人と動物が遭遇するシーンも、別々に撮影された映像をつなげているが、役者の視線・表情などの演出によって動物とのふれあいを表現している。実際に人と動物が触れ合うシーンもある。

以上から、「北の国から」の映像は自然風景・動物・人の描写の３つに分けられる。次に、自然風景・動物の映像について分析する。

【自然風景】（特に四季を連想させる映像を分析）
本編で数多く用いられる四季の映像に加えて、冒頭のタイトルバックの映像も四季を表現している。本編の四季の映像のようにストーリーと関連させる必要がなく、本編よりもさらに単純な形で四季の映像を構成することができる。それら 58 パターンをさらに単純に構成したのが DVD のパッケージ写真 12 枚であり、樹木(もしくは樹林)・空・草花の 3 要素で構成されている。それらが四季の変化にともなう光と色の変化によって四季そ

れぞれのらしい姿を見せている。本編に数多く見られた四季の映像が 12 パターンに集約できるのは、広大な舞台が限定された姿で描かれており、ほんの一握りの自然風景でしか見られないことを示している。

【動物】
映像の持つ効果は流れの部分で述べた。動物映像が放つメッセージは文明に相対するもの、自然である。しかし、軽快な BGM とともに重ねられる動物映像は、動物が発する音、人に対する警戒心とそれから発展する凶暴性の気迫を封じる。無邪気な子どもの姿とからめて流される動物の愛らしい姿は、そのメッセージ性を減少あるいは消滅させかねない。

これらの映像に加えて、倉本のメッセージをより具体的な形で見せる自給自足の生活の映像、北海道と対照的に描かれる東京の映像を分析する。

【自給自足の生活】
作業過程見せ :丸太小屋・風力発電・沢の水を引く
日常作業 :火を起こす・ランプの火屋を磨く・山菜を採る
もの :ランプ・風力発電のプロペラ・水場
炎 :風呂の焚き口・石炉・ストーブの薪
このような特徴に分けられる映像で、自給自足の生活は描かる。これらが発するメッセージは、自給自足の大切さだけでなく、自然と闘い、豊かな生活を手に入れようと北海道に足を踏み入れた時代から豊かさの質が変化し、富は無く不便な生活が豊かな生活として描かれうる時代であることだ。黒板一家の生活は、脱近代化であり、原点回帰なのである。

【東京の描かれ方】
そびえ立つビル群・車と人の雑踏―これら使い古された都市像と共に、東京は文明と消費の象徴として描かれる。さらに、東京は純の言葉で明確に批判し、北海道の良さは言外に、つまり富良野のさまざまな映像に託すことで表現している。このような文明（都市）と自然（地方）の二元対立によって、このドラマが描く北海道像をより明確にし、他の側面を排除することができる。

スペシャルドラマのストーリー分析

連続ドラマ終了後、2～3 年おきに放送されたスペシャルシリーズは、連続ドラマと比較すると、人物描写によって二つのメッセージを発信し、同時に出来事が中心となり、成長する純と螢の心理描写、年老いていく五郎の姿を描くことに力点が置かれていった。特に、役者を変えずに描く成長と老いは、22 年をかけてしか描き得ない時の集積であり、このドラマが他と一線を画す最大の特徴である。また、初期には語られた開拓時代との関連性が年を経るにつれて語られなくなり、次第に現代とのギャップが大きく扱われ、ゴミ（拾って来た家など）との関連性が描かれるようになったこともまた、時代の流れに則した描き方と言える。

また、22 年間で人や町は変化し、さまざまなものが姿を消し、さまざまな物が入り込んだが、五郎と自然は変らぬ姿で描かれている。大きく変化した時代に、自分のゴールを決めて変らない生活をしようとした五郎が、一人際立ったと言える。

4.「北の国から」の幻想効果

「北の国から」を取り巻く状況

「北の国から」は高視聴率を記録し、美術セットが残された麓郷だけでなく富良野市全体が「北の国から」の要素を多分に含んだ観光地となり多くの人が訪れている。また、書籍・DVD などに加えて、ドラマの中のエピソードにあやかったさまざまな関連グッズも販売されている。

地元の人々の受け止め方

地名がそのまま使用されたロケ地の麓郷は、富良野市東部に位置する過疎の集落である。放送終了後、人の少ない村に観光客がどっと詰めかけ、村は混乱した。そして放映終了を迎えた 2002 年、地元の人々から聞かれる声には、気づかなかった地元の良さや自然の美しさを知った、故郷を誇りに思えた、ドラマが遺産・財産となったなど、変化が見られる。しかし、語られるのは、“雄大な大地を舞台”に描かれたドラマの中でスポットライトが当てられた場所、黒板一家の生活や風景であり、地元の人々の生活や風景では決してない。

視聴者の受け止め方

視聴者は、ドラマで描かれる成長と老い、思春期などの感情や出来事と、その時々の自分の感情や出来事とをクロスさせることでより感動を深くしている。

しかし､テレビドラマのセットがキレイに保存され、現実の存在も歴史の痕跡もないところに人々が吸い寄せられる奇妙さ、あやかり商品に見られる木目のデザインは、まがいものの不自然さが隠せない。

自然と人間との関わりのかつての理想的な姿をイメージしながら､現代でその関係を復活させたいと願う。しかし、それは自らの生活の切実な要求から発生するものではなく、生活と切り離された空想でありリアルなものにはなりえない。自らの欲求をほどほどに満たすことにおいては、テレビ視聴によってその関係の復活を五郎に託し、そのひたむきな姿を見ることが自分と自然との距離を程よく関係づけてくれているのかもしれない。そしてそこには、作り手がレンズ越しに自然風景に向けた視線は消滅し、雄大な大地の舞台の上の役者と、妙に建てつけのよい美術セットに向けられる視線が残るのみである。

5．総合考察

ポスターや旅行パンフに描かれる北海道には人の姿はなく、多くが自然景観である。一方、「北の国から」が描く北海道は､たとえ自然が描かれていたとしても、そこにある黒板一家の生活のイメージを拭うことはできない。このように形成された北海道のイメージは、さだまさしの歌う歌詞のないオープニングテーマにもついて回り、歌を聞いただけでも自給自足の生活の厳しさ、それゆえの人々の美しさのイメージが想起される。また、2002 年にフジテレビで開催された「ありがとう北の国から展」が再現セットや小道具を見せて成立し得るのも、自然風景はなくとも、黒板一家の存在のみで満足することができるからである。

４．から、旅人と定住者との風景の見方に関する二つの態度が、視聴者（観光客）と地元の人々とには当てはまらず、両者はほぼ同一であるといえる。ブラウン管を通して麓郷の映像が２２年をかけて蓄積され、形成された共通のイメージ。それは、３．で示した〈自然の雄大さ〉〈人と自然の近接〉〈原点回帰の人の生活〉のメッセージを持つ枠取りされた映像が、さらに生活の部分のみ枠取りされ人々のイメージに定着していることを意味する。そして、４．から、それが実際の富良野のイメージ作りに大きく影響していること、かつては安易な観光化を批判した地元や倉本も､「観光」を「確認」という言葉にすり替えて「北の国から」を永続させようとすることが、これらの関係にさらに拍車をかけていることを指摘し、本研究を終える。